



## コラム第10回 「勉強するなら金をくれ（前編）」

私が中学生の頃に流行したドラマのセリフ「同情するなら金をくれ」。ご存知の方も多いであろうこの言葉。盗みに手を染める12歳のすずを担任教師が諭そうとする場面で、「悪いことをしてでも私には金がいる。金がないと重病のお母さんの手術が受けられない。父は呑んでくれて暴力を振るうばかり。薄っぺらな同情心よりも金をくれ！」との気持ちがこもった痛烈な言葉です。

さて今回のコラム「勉強するなら金（またはモノ）をくれ」は、前述のセリフほど深刻ではないながらも、勉強に向かえないわが子をお金やモノで動かそうとすることはアリかナシかというお話です。お金をあげるから（または好きなモノを買ってあげるから）勉強しなさいというのはよく聞く話です。もちろん親としてそれがあまり良くないとは思いながらも、一向に動く気配のないわが子への苦肉の策であり、最終手段と考えてのことでしょう。私の子どもの頃を思い返しても、いい成績をとった時に2～3度、お金のものを貰ったような気もします。勉強で頑張ってくると嬉しい親心、さりとて思いどおりにはいかない子どもの行動。さて、どうしたらいいのでしょうか。

私なりの結論を申しますと、動き出すきっかけや、良い結果の思いがけないご褒美としてプレゼントすることはアリです。ですが、馬に人参をぶら下げて走らせるように「勉強したらこのお金をあげる」という事前の約束事は、お金をもらった途端に勉強への意欲が減退してしまう可能性が高いようです。それは、次の実験（および追試験）で明らかになっています。

発想次第で様々な形を作る「ソマ・パズル」というおもちゃがある。大学生を2グループに分け、それぞれ30分×3回、パズルで様々な形を作ってもらった。1つのグループは1つ形を作るごとに1ドルの報酬が得られ、もう1つのグループには報酬の話はしなかった。間で8分間の休憩をとり、その間、実験者（監督）は席を外した。すると、報酬がないグループは休憩中もパズルに取り組む時間が長く、反対に報酬をもらうグループは取り組み時間が少なかった。つまり、本来楽しいと感じていたパズルが報酬をもらうための手段に切り替わってしまい、パズルをすること自体への興味や意欲が薄れたのである。

参考文献：エドワード・L・デシ リチャード・フラスト(1999)「人を伸ばす力」新曜社

人はそれぞれに能力の違いがあり、覚えるのが得意な子、考えて工夫するのが得意な子、体を動かすのが得意な子、思いやりや気遣いに長けた子など、1人1人には様々な長短があるものです。そして各自の得意な部分を伸ばす中で、自然と学習にも身が入っていくものと私は考えています。一方で「学校の勉強

の出来・不出来」ばかりが良くも悪くも注目されやすく、学校でも家でも「勉強できてるの？」と大人の期待の目にさらされやすいものです。「成績」や「試験」が、進学・就職に直結しているという感覚が親の側に根強くあるためでしょうか。では、勉強や学習自体への興味や意欲を高めるため、われわれ親にできることは何でしょうか。

野中浩一 拝